

# 大力物語

菊池寛

青空文庫



昔、朝廷ちやうていでは毎年七月に相撲すもうの節会せちえが催もよおされた。日本全国から、代表的な力士を召めされた。昔の角力すもうは、打つ蹴ける投げるといったように、ほとんど格闘かくとうに近い乱暴なものであつた。武たけの内宿彌うちのみと当麻たいまのくえはやとの勝負に近いものだ。

だから、国々から選ばれる力士も、その国で無双むその強者つわものだつたのである。

ある時、越前えちぜんの佐伯氏さえきのうじなが長ながが、その国の選手として相撲の節会に召めされることになつた。途中近江おうみの国高島郡石橋を通つて

いると、川の水を汲んだ桶を頭にいただいて帰ってくる女がいた。

田舎いなかめづらに珍しい色白の美人である。氏長は、心がうごいて馬から

降りると、その女が桶をささえている左の手をとった。すると、女はニツコリ笑って、それを嫌いやがりもしないので、いよいよ情を覚えてその手をしつかとにぎると、女は左の手をはずして、右の手で桶をささえると、左の手で氏長の手をわきにはさんだ。氏長はいよいよ悦えつに入つて、いっしょに歩いたが、しばらくして手を一度ぬこうとしたが、放さない。

越前一の強力といわれる氏長が力をこめて抜ぬこうとしても抜けないのである。氏長は、おめおめとこの女について行く外はなかつた。家に着くと、女は水桶をおろしてきて氏長の手をはずして、

笑いながら、「どうしてこんな事をなさるのです。あなたは一体どこの方ですか」という、近く寄つて見ると、いよいよ美しい。

「いや、自分は越前の者であるが、今度相撲の節会で召されて参るものである」というと、女はうなずいて「それは危いことである。王城の地はひろいからどんな大力の人がいるかもしれぬ。

あなたも、至極の甲斐性かいしょうなしと云うわけではないが、そんな大事の場所へ行ける器量ではない。こうしてお目にかかるのも、御縁えんだからもし時間がゆるせば、私の家に三七日逗留とうりゆうしたらどうか。その間に、あなたをきたえて上げましょう」と、いうた。

三七日とは、三七二十一日である。その位の日数は、余裕よゆうはあったので、氏長はこの家に逗留することにした。

## 二

ところがこの女の鍛錬法たんれんほうというのが甚はなはだおかしい。その晩から、強飯こわめしをたくさん作って喰たべさした。女みずからにぎりめしにして喰べさしたが、かたくて初はどうしても噛かみ割ることが出来なかつた。初の七日は、どうしても喰いわたることが出来なかつた。中の七日は、ようよう喰いわたることが出来たが、最後の七日には見事に喰い割ることが出来た。すると、女はさあ都へいらつしやい、こうなればあなたも相当なことは出来るだろうといつて、都へ立たした。この二人が情交をむすんだか、どうかはくわしく

書かれていない。この女は、高島の大井子という大力女である。田などもたくさん持つて、自分で作つていた。

ある年、水争いがあつて村人達が大井子の田に水をよこさないようにした。すると大井子は夜にまぎれて表のひろさ六、七尺もある大石を、水口によこさまに置いて、水を自分の田に流れ込むようにした。翌日になると、村人が驚いたが、その石を動かすには百人ばかりの人足が必要である。その上、そんな多人数を入れたのでは、田が滅茶滅茶めちやめちやに踏み荒あされてしまう。それで、村人が相談して大井子の所へ行つて謝つた。

今後は思おぼしめし召かなに叶うべきほど水をお使い下さい。その代りに、どうかあの石だけは、とりのけて頂きますといった。すると、大

井子は夜の間にその石を引きのけてしまった。その後、水論はなくなつてしまつたが、この石は大井子の水口石みなぐちいしといつて、後代まで残つていた。この事件で、大井子の大力が初めて知れたのである。

ところが、近江の国にはもう一人大井子などよりもつと有名な大力の女がいた。それは近江のお兼かねである。この女のごとは江戸時代に芝居しばいの所作事しよさごとなどにも出ているし、絵草子えがにも描かれて

いる。  
この女は、琵琶湖びわこに沿うたかいづの浦うらの遊女である。彼女は、ひさしくある法師の妻となつていた。妻とはいつても、遊女で妻もおかしいから、今でいえば妾めかけである。



## 三

ところが、この法師が浮気者うわきものであつたとみえ、近頃ちかごろは同じ遊女仲間の一人に、心をうつして、しげしげ通つているといふ噂うわさが、お兼の耳に伝わつて来た。お兼は、安からず、思つていた。ある晩、ひさしぶりに法師がやつて来た。いつしよに物語りしてゐる間、お兼は何もいわなかつた。いよいよ床とこに入つてから、お兼はその弱腰よわこしを両足でぐつとはさんだ。法師は、初めたわむれだと思つて「はなせはなせ」といったが、お兼はいよいよ力をいれたので、法師は真赤になつてこらえていたが、やがて蒼白そうはくに

なつてしまった。すると、お兼は「おのれ、法師め、人を馬鹿ばかにして、相手もあろうに同じ遊女仲間の女に手出しをする。少し思あい知らしてやるのだ」といつて、一しめしめたところ、法師は泡あわを吹ふいて気絶した。それで、やっと足ははずしたが、法師はくたくたとなつたので、水を吹っかけなどして、やっと蘇そせい生させた。

その頃、東国から大番（京都守衛の役）のために上京する武士達が、日高い頃に、かいづとまに泊つた。そして、乗つて来た馬どもの脚あしを、湖水で冷していた。すると、その中のかんの強い馬が一頭物に驚いたと見え、口取の男をふり切つて、走り出した。

たくさんの男が、跡あとを追いかけたがどうにも手におえない。中には、引きづなに取りすがる者もいたが皆みな引き放されてしまう。

ちようど、そこへお兼が通りかかった。彼女は高いあしだをはい  
ていたが、<sup>かたわら</sup>傍をかけ通ろうとする馬の引きづなのはずれを、あし  
だでむずとふまえた。すると馬が<sup>いきおい</sup>勢をそがれてそのまま止まった。  
人々はそれを見てあれよあれよと目をおどろかした。

さすがにあしだは砂地に、足首のところまで、埋<sup>う</sup>まっていた。  
これ以来、お兼の大力が世間に知られたのである。常に、五、六  
人位の男が集まっても、私を自由に出来ませんよ、といった。五  
つの指ごとに、弓を一張ずつはらせたことがある。弓は、二人張  
三人張などいうから、指一本でもたいした力である。

## 四

昔、美濃国、小川の市に力強き女があつた。身体も人並はずれて大きく百人力といわれていた。仇名を美濃狐といつた。四代目の先祖が、狐と結婚したと云うことであつた。狐と大力とは別に関係はないわけだが、狐の兇悪な性質を受けたと見え、現在の闇市の親分のように、商人をいじめては、いろいろな品物を奪いとつていた。ところが、同じ時に尾張国片輪の里に力強き女がいた。この女は、きわめて小柄の女であつた。大力の聞え高い元興寺の道場法師の孫に當つていた。この尾張の女が、美濃狐のことを聞いて、一度試してやろうと云うので、蛤と熊葛で作ったねり皮とを船に積んで、小川の市へやって来た。こ

ういう他国者の新顔を、痛めつけることは昔も今も暴力団的顔役の仕事である。美濃狐は、早速尾張の女の船へ行つて、蛤を差し押えて、「お前は、一体、どこの者だ。誰にことわつてここで商売をするのか」といった。尾張の女は、だまつていたが、四度目に（どこから来たか大きなお世話だ）と、返事した。すると、美濃狐が怒つて、尾張の女を打とうと手を出すと、尾張の女はその手を捕えて、熊葛のねり皮で打った。すると、あまりに力が強いので、そのねり皮に肉がくつついて来た。返すがえす打つと、その度に肉がついた。さすがの美濃狐も、音を上げて謝った。すると、尾張の女は、以後商人達を悩ますなど、いましめてから許してやった。その後美濃狐は、小川の市に来なくなつたので、市

いちび

と人達は皆みな欣よろこび合つて、平かな交易がつづいた。

この尾張の女は、そうした大力にも似合わず、その姿形は、ねり糸のようになやかであつた。そして、その郡の大領（郡長）の奥おくさんであつた。あるとき、主人の郡長のために、麻あさの布を織つて、それを着物に仕立てて着せた。それは現在の上布のようなものでしなやかで、すこぶる品のよい着物であつた。ところがこの郡長がそれを着て、国司の庁へ行くと、国司が、それを見て、ほしくなつたと見え、「その着物をわしによこせ。お前が着るのにはもつたない」と、云つて取り上げたまま返さない。

郡長が家に帰ると、今朝着せてやつた着物を着ていない。妻である尾張の女がそのわけを訊ねるとたず国司にまき上げられたと云う。妻は、あなたはあの着物を心から惜しいおと思うかと訊いたき。すると、良人は極めて惜しいおっとと思うと答えた。すると、尾張の女は翌日国府へ出かけて行って、国司に面会を求めて返してくれと云った。すると国司は、うるさがって、この女を追い出せと、役人達に云いつけた。多勢の役人が、寄ってたかつて連れ出そうとするが、ビクとも動かない。たちまち、役人を振りはらって国司に近づくと、片手で国司を引き倒すと、そのまま引きずって、国府の門外へ連れ出した。国司は、青くなって、「返す返す」と、悲鳴

を揚あげた。この女は、呉くれたけ竹をねり糸のように、くしやくしやにする位強かつた。ところがこうした強い女も、封建ほうけんてき的な家庭制度には敵かなわない。良人の父母が云うには、国司を手ごめにした女を妻にしているは、お前はこの先、芽の出るわけはない。私達にも、どんなめいわくが、かかるかもしれない、早速りえん離縁すべきだと。それで主人の郡長は、元々意気地なしだったと見え、父母の教に従って、たちまち妻を離縁した。

尾張の女は仕方なく、故郷へ帰って住んでいた。ある時、故郷を流れている川の南辺へ行つて、洗濯せんたくをしていると、折から荷物ものを積んだ船が通りかかった。船の人々がこの女をからかった。あまり、しつこいので、「女だと思つて馬鹿にすると、頬ほつぺた



をなぐるぞ」と、いった。すると、船の人々は手んでに物を、女に投げつけた。

すると、女は怒つて、川の中へはいると、舳へさきをぐつと水の中へ押し入れた。荷物が水びたしになった。船の連中は、人を雇やとつて荷物を陸にあげ、水をかい乾ほして、荷物を積んで、動き出そうとしてまた、女の悪口をいった。女は再び怒ると、今度はその船に手をかけて、人も荷物ものせたままグングン陸の上へ引きあげ、一町ばかり引きずつて行つた。船の連中は、青くなつて、ひたあやまりにあやまつた。女はやつと、機嫌きげんをなおして、また船を川まで、引きずりもどしてやつた。

## 六

もう一人の女大力は、相撲人すもうびと、大井光遠の妹である。光遠は、横ぶとりの力強く足早き角力すもうであつた。妹は、形有ありさま様尋常じんじようで美しい女であつた。光遠とは、少し離れた家に住んでいた。ある日、村人が光遠の所へ馳かけ付けて来て（たいへんです、妹さんが、盗人ぬすびとに人質にとられました）と云つた。光遠は、それをきいたが、少しも驚かず（音にきく昔の薩摩さつまの氏家なら妹を質にとられようが）と、すましている。村人は、拍子ひようしぬけがして、妹の家の方へ引き返して来た。先刻、盗人は村人達に追われて逃げ損い、光遠の妹の家に走り込んで、（この女房を人質に取つた。

寄り近づく者あらば、この女房をさし殺すぞ」と、村人達に宣言したのである。それでその中の一人が、あわてて兄さんの家へ知らせに行つたのであつた。

兄が相手にしないので、その村人は一体どんな容子ようすかと家の中をのぞいて見た。すると、盗人は光遠の妹を背後から両足で抱だいて、その胸に逆手さかてに持った短刀をさしあてている。光遠の妹は、恥はずかしいと見えて、袖そでで顔をかくしているが、だんだん退屈して来た見え板の間に荒づくりの矢竹が二、三十ちらばつてるのをいじっていたが、それを板の間におしつけると一本ずつわらをにじるように、にじりつぶしている。のぞいていた村人が、びっくりしたが、盗人もそれに気が付いたと見え、顔色が急に青ざめたと

見ると、たちまち人質を放して逃げ出した。いったん怖<sup>おし</sup>氣づいただけに、たちまち村人に捕えられてしまった。その男を村人達は、光遠の家へ連れて行って殺しましょうかと云うと、光遠は笑つて（もし妹がその男の太刀を持つ手を逆にねじあげたら、その男の肩<sup>かた</sup>の骨はたちまち砕<sup>くだ</sup>けただろう。危い目に逢<sup>あ</sup>つていたのは、妹でなくてその男だったのだ。殺すわけはないではないか）と、云つて逃がしてやった。そして、言葉をつづけた。（妹は、わしより二倍は強い。男に生れたら、日本中に相手はないのだが……）と、嘆<sup>たん</sup>息<sup>そく</sup>した。

女大力物語のついでに、男の方も二、三人書いておく。叡山えいざんの西塔さいとうに実因僧都そうずという人がいたが、この人が無類の大力であった。ある日、宮中の御加持ごかしに行つて、夜更よふけて退出すると、何かの手違いで、供の者が一人もいない。仕方なく衛門の陣じんを出ようとすると、軽装した男が一人寄つて来て（お供がないのですか。私が負つて差しあげましょう）と云う。それはありがたいと云つて負われると、大宮二条の辻つじまで行つて、（ここで降りてくれ）と云う。僧都が（いや、わしの行く先は、ここではない）と云うと、その男が声を荒らげて（命は惜おしくないのか。その衣きぬを脱ぬいで、どこへでも勝手に行け）と、いった。すると、僧都は負

われながら脚あしでその男の腰をぐつとしめつけた。まるで、腰が切れそうである。男は、びっくりして（失礼な事を申しました。お望みのところへ参ります）と、云った。すると、僧都は（宴うたげの松原へ行つて月見をしたい）という、男はそこまで負つて行つた。そして、どうぞ降りて下さいといったが、下りようとしなない。ゆうゆうと月にうそぶいてから（右近うこんの馬場が恋しくなつた。あそこへ行け）と、いうと、男は（そんなには、参れません。もう、御かんべんを）と云うと、僧都はまた脚をぐつとしめつけた。すると男は（参ります。参ります）と悲鳴をあげたので、僧都は脚をゆるめた。男は仕方なく、右近の馬場へ行つた。そこで、歌など口ずさんでから、今度は喜辻の馬場へ歩けといった。そして、

僧都の宿所まで負われて来たときはもう暁あかつき近くで、男はへたへたになつていた。僧都は男の背中から下りてから、その男に衣をぬいでやったが、男は地面にうずくまつたまま、しばらくの間は起き上れそうにもなかつた。

もう一人もやはり僧そうりよ侶で、広ひろさわ沢の寛かんちよう朝そうじよう僧しょう正という人である。大僧正になつた人で、仏教の方でも有名であり、宇多天皇の皇子の式しきぶきよう部ぶ卿きやうの宮みやの御子みこである。この人は、広沢に住んでいたが、同時に仁にんなじ和寺わじの別当をも兼ねていた。別当というのは、檢非違使けんびいしの長官をも云うのだが、神社仏寺の事務総長をも云うのである。ある時仁和寺が修理工事を始めていた頃の話である。

ある夕方、寛朝僧正は、もう工事がどの位進んだか見たくなつ

て、一人で高足駄たかあしだをはき、杖つえをついて、工事の現場を視察していた。現場には、足場のために、高いやぐらが組んである。その柱をくぐりながら見ていると、烏帽子えぼしを引き垂れて着た男が、つかつかと寄って、僧正の前に立った。見ると半ばかくすようにではあるが、刀をぬいて、それを逆手に持っている。

僧正、これを見て（何の用ぞ）ときくと、男は片膝かたひざをついて、（自分は御存じないものである。あまりに寒さに堪たえないので、お召めしになっている衣物を一つ二つ賜たまわりたいのである）と、云つたが、今にも飛びかかりそうである。

僧正は（それはわけもないことだが、なぜ素直に頼まないのか。そのやり方が怪けしからぬではないか）と、いうと、横に立ち廻



ったかと思うと、男の尻しりをハタと蹴けった。すると、男はたちまち姿が見えなくなつた。僧正はおかしいと思ひながら周囲を見たが、どこにもいない。それで、庫裡くりの方へ行つて、人を呼んだ。法師達が出て来ると、（今、わしを剥はごうとする者がいたのだが、急に見えなくなつた。灯をともしてさがしてくれ）と、云いつけた。十人ばかりの僧が、手に手に灯を持ってさがしまわつていたが、そのうちの一人が上をさして（やあ、あすこにいる）と云うので皆が見上げると、一人の黒い装束しょうぞくをした男が、足場のために作つたやぐらの柱と柱の間に、はさまれて身動きが出来ずに、むくむく動いているのであつた。二、三人昇つて見るとさすがに、刀だけは持っていたが、ぼんやりした顔をして、目ばかりパチパ

チさしていた。僧正のところへ連れて来ると、僧正は（老法師とも馬鹿にしてはいけないぞ。また、わるいことは今後やらない方がいい）と云つて着ていた衣の綿の厚いのを脱いでその男へ与えた。

これらの大力物語のいずれも誇張こちように違いないが、その誇張が空とぼけていて、ほほえましいものである。この話なども、蹴られて、積んであつた材木の上のつかつていた程度であろうが、それを話しているうちに、だんだんやぐらの上のせてしまったのであろう。





# 青空文庫情報

底本：「おかしい話へちくま文学の森5」筑摩書房

1988（昭和63）年4月29日第1刷発行

1989（平成元）年2月10日第5刷

底本の親本：「筑摩現代文学大系27巻」筑摩書房

1977（昭和52）年

初出：「新大阪新聞」

1947（昭和22）年

入力：内田いつみ

校正：小林繁雄

2009年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大力物語

菊池寛

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>